

巻 頭 言

高知女子大学看護学会長

野 嶋 佐由美

科学についての考え方、科学探求方法は急激に変化し、大きな変革が発生しています。この動きのなかで、本学会は、看護のイノベーションをテーマとして取り上げています。

看護学はScienceであり、Artであるというナイチンゲールの核心的な主張から出発しています。医学を中心とする客観性を重視するサイエンスと、人間の独自性を重視するヒューマンサイエンスとの間を揺れ動きながら、医学とは異なる独自性を主張し、学問としての独立性を獲得してきました。看護としての機能の独自性とケアの対象である個人や家族、組織、地域への対峙の仕方として看護哲学と看護提供方法を探求しつつ独立性を獲得して発展させてきました。

一方で、ケアは多様で複雑な概念であることから、ひとつの学問領域からのアプローチでは限界があることを踏まえて、日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会の看護学者は、ケアサイエンスの構築の必要性を提唱し取り組んでいます。看護学という一学問分野を超え、これまで以上にケアの射程を拡大し深掘していくこと、さらに、自然科学、社会科学、人文科学などの科学的枠組みを超えて新たな科学を構築していくことについて提唱しています。看護ケアのために、看護学の枠を超えて諸科学を積極的に取り入れ活用して、新たな次元へと飛躍するよう、イノベーションを起こしていくMovementが起きていると言えるでしょう。

AI、ビックデータ、オープンサイエンス、DX、ロボテックス等が発展するなかで、看護学、看護実践者には大きな期待が寄せられています。例えば、AIはいくつかのモデルを提案することはできますが、最後の仕上げには看護学者の頭脳と知恵が関わらないと有意味なものにはなりません。看護者は最も妥当なモデルを選択して、説明可能なモデルを構築していくことが期待されています。AIと対話し、ケアのためにできる修正、改善し、最後にはケアの対象者とともに、ケアを共創していくイノベーションが待たれています。

看護学を取り巻く科学的発展の急速な発展、科学哲学のパラダイム変化により、さらに看護が発展していくためには、看護学もその守備範囲を拡大していくこと、看護学の学際性や多様性へ積極的に挑戦していくことが求められています。この流れの中で、看護はサイエンスでありアートであることを踏まえて、ケア対象の個人、家族、組織、地域に対して、ケアとキュアが統合された看護ケアを目指して、看護のイノベーションが求められています。看護イノベーションは、大きなスコープのみならず、日々の看護活動のなかで循環的に取り組むことが可能であり、研究者として、教育者として、実践家としてそれぞれの立場で、今一度看護の原点に戻り、イノベーションを湧き起こしていくことが必要であると実感しているところです。次世代の看護者が勇気をもって挑戦して下さることを期待しています。

高知女子大学看護学会編集委員会の努力によって、第48巻は総説1論文、原著論文5論文、研究報告5論文を掲載することができました。学会員の皆様の研究活動の成果のみならず、博士論文、修士論文、卒業論文などの成果など多岐にわたって、興味深い論文が掲載されています。本学会誌の特徴の一つは、査読者からの、投稿者の意向を汲み取り尊重した教育的な指摘がなされていることです。この場を借りて、本学会誌に育ててくださっている方々に感謝いたします。